

道博協ニュース

第8号

発行所 昭和53年12月1日
 北海道博物館協会(事務局)
 札幌市中央区宮ヶ丘3の1
 札幌市円山動物園内
 (011)-621-1426

第十七回北海道博物館大会終る

第十七回北海道博物館大会は、道内の各博物館・園及び相当施設に勤務する職員並びに関係者が、当面する課題を提起して、その解決について研究討議し、地域における社会教育の振興に寄与するものとして六月二十九日(木)から三十日(金)の二日間富良野市富良野文化会館において道内の四十四館園から九十三人が参加し、シンポジウム・分科会・施設見学と成功裡に開催された。

大会における討論・意見等詳細については、後日発行される大会報告書を一覧していただくが、その概要を報告する。

第一日

午前九時から開会式を行ない、引続いて午前十時から「北海道における望ましい博物館・園のあり方をめざして」を主テーマとするシンポジウムが行なわれ、次の四つの発表が行なわれた。

一、北海道の今日的課題から見た博物館・園のあり方
 発表者 北海道開拓記念館 学芸部長 北川芳男氏

二、社会教育活動の立場から見た博物館・園のあり方
 発表者 北海道教育委員会 雄氏

社会教育主事 磯貝 登氏
 三、博物館学研究の立場から見た博物館・園のあり方
 発表者 北海道近代美術館 館長 倉田公裕氏
 四、利用する住民の立場から見た博物館・園のあり方
 発表者 (社)北方圏センター事務局次長 横川寛二氏
 司会者 網走市立郷土館館長 米村哲英氏
 記録者 上富良野町教育委員会社会教育係長 野尻已知 雄氏

また、この発表に対する討論は、午後一時から網走市立郷土博物館館長米村哲英氏を司会者として活発に行なわれた。

分科会は、午後二時から会場を分けて行なわれたが、第一分科会は、テーマを「市町村における社会教育施設としての博物館・園のあり方」の三つの発表が行なわれた。

一、釧路町郷土館社会教育指導員 高島洋三郎氏
 二、小樽市博物館学芸員 土屋周三氏
 三、ひがし大雪博物館学芸員 山之内統氏

助言者 北海道立近代美術館 館長 倉田公裕氏
 北海道教育委員会社会教育主事 磯貝 登氏
 (社)北方圏センター事務局次長 横川寛二氏
 司会者 上富良野町教育委員会社会教育主事 村端外利氏
 記録者 富良野市郷土研究会 佐藤亨一氏
 第二分科会は、「市町村における郷土館・資料館の建設をどう進めるか」をテーマと

して二つの発表が行なわれた。

一、虻田町教育委員会社会教育課長 石浦明氏
 二、八雲町教育委員会社会教育主事 赤井義範氏
 助言者 北海道開拓記念館学芸部長 北川芳男氏
 元富良野市立郷土館館長 山下緑郎氏
 司会者 旭川市立旭川郷土博物館館長 松井恒幸氏
 記録者 占冠村教育委員会社会教育課長 中村博氏

その後、午後四時から北海道博物館協会総会が行なわれ、議長団に富良野市教育委員会の原田武氏及び北海道近代美術館の武田厚氏を選出し、昭和五十二年度事業報告、収支決算報告及び会計監査報告が承認され、昭和五十三年度事業計画案及び収支予算案が原案どおり決定された。また、第十八回大会開催地を札幌に決定するとともに役員欠員選任は、その所属の後任者を夫々選任して決定した。

また、午後六時から会場を(次頁下段に続く)

北欧の博物館みてある記

社団法人北方圏
センター事務局次長 横川 寛 二

近年、道内においても博物館、資料館、郷土館等の施設が多数開設されていますが、その計画から開設・運営には並々ならぬ努力がはらわれていることと思います。今回は、社団法人北方圏センターの出版部長をしております横川寛二氏に北欧の博物館について記していただきました。

北欧へ行った時、折りあつて二、三の博物館に接するこゝとが出来た。もち論、博物館見学が目的の旅行ではなかつたし、通りすがりのちよつと見である。デンマーク国立博物館も七部門のうち足を運んだのは先史関係だけだし、残念ながら与えられた題目の「北欧の博物館を見て」など構えたことを書ける仕組みになつていない。どこまでも、素人がオスロ・ストックホルム・ヘルシンキ・コペンハーゲンで感じたままの話である。

個々の展示物、その文化的民俗学的な価値や陳列様式の問題はさておき、各都市で強い印象を受けたのは、博物館・美術館・図書館など文化施設がごく自然な形で都市や市民と密着していることであつた。オスロの有名なノルウェー民俗博物館は、市西部のビークドイ半島にあるが、同半島は、これら施設の集中地区、民俗博物館から歩いて数分の場所にノルウェー国民が誇りにするバイキング博物館・コンチキ号博物館・海洋博物館、さらにナンセンが北極、アムンセンが南極探検に使つた極地探検船「フラム号」の展示係留場などがかたまっている。そして、これらとともに深い緑に囲まれ、市民の憩いの地、乳母車を押し、た若い夫婦、子供、余生を楽しむ老人たちが木々の間で体を休めながら次々と施設を周っていく姿が見られた。

都市や市民との密着は、コペンハーゲンでも強く感じられた。同市の地図を見てもわかるとおり、市中心部のクリスチャンボルグ場を囲みニイ・カールスベルグ・グリフト・テーク美術館、トゥバルセン美術館、演劇博物館、国立博物館、王立兵器博物館、国立図書館、植物園とローゼンバーク城を取り巻き、鉱物博物館、国立美術館、スカンジナビアは虫類センター、音楽史博物館、ヒルシュスブルグスケ・コレクシオン、ダビデ・コレクシオン、また、アマリーエン城周囲に医学博物館、工芸博物館、自由博物館などが集まっている。

それぞれ隣り合っていたり、離れていても百メートルか百五十メートルの範囲内におさまっている。自然に集まったのか、都市計画的に配置したのかどうかは知らないが、とも角、子供たちや家族連れ、観光客が絶えないのは、一つには市中心部にまとまって立地していることにも大きな原因があるように思つた。

建物の構造ではコンチキ号博物館に階段がないのが面白かつた。同博物館は、ノルウェーの有名な文化人類学者のハイエルター博士が、ボリネシア人はペルーから来たのではないかと自分の仮説を立証するため、同志ら四人とともにペルーからポリネシアまで南太平洋六千キロを航海した時に使つたバルサウツドのいかだ船「コンチキ号」や船の備品、その際の航海日誌など数々の関係資料を展示したところ。建物の外観は何の変哲もないが、道路から自然な傾斜でのぼつた入口を通りすると、緩やかなくだりで階下に降りる。その一階を一巡して見終わると、外の道路と同じ水準の出口になつていて、入口と出口は別、これだと、乳母車を押す人や車いすの人も自由に観覧出来るし、子供に人気がある博物館だけに危険防止を考え、階段をなくしたのだろう。

北城荘に移し、滝口国一、富良野市長を招いて懇親会が開かれ、なごやかに親睦を深めた。

第二日

午前九時から富良野市教育委員会社会教育主事の原田武氏及び北海道近代美術館学芸部長事務代理の武田厚氏を議長団として、また、記録を富良野市教育委員会社会教育主事の相沢博氏として全体会議が行なわれ、前日の第一分科会及び第二分科会の討論の報告が夫々の司会者であつた村端外利氏及び松井恒幸氏から行なわれたが、これに対して、協会が当面対処しなければならぬ多くの意見が述べられた。

引続いて、この大会の最後の日程である施設見学に移り富良野市営ワイン工場と鳥沼公園の見学を行ない、午後一時開催地である富良野市及び富良野地区広域社会教育協議会に対して、中川会長が感謝決議文をよみあげ二日間の日程をとおこりなく終了して散会した。

め商家、鍛冶屋、葉屋など百五十棟を移設、復元している。中には、まだ、北欧の古い信仰を捨て切れず、棟飾りに異教徒的色彩の像を残す、キリスト教渡来後間もない十二世紀のスターブ様式の木造教会、文藝イブセンの書斎も見られる。農家では母屋、それに接属して建てられた息子夫婦の家、校倉式の丸太組穀物庫、家畜小屋、北欧の人々とは切り離せないサウナぶろの小屋などがワンセットで復元されたものがあり、内部には当時の使用の日用具類が元の形で、元の場所に展示、保存されている。しかも、これら建物は、丘あり、谷ありの道筋に沿って年代順に配置され、次々と目先がかわるため、疲れも感ぜず、自然を楽しみながらノルウェーの建築変遷史、建築技術・生活発達史・民俗史などをすべてを見る思いがし、興味が尽きなかった。

その一つを紹介してみよう。今から三・四百年前の農民、当時は国民のほとんどが農民だったが、家は丸太組みで、六メートル四方の小さなもの

だった。屋根は板の上にアブラが多く、腐りにくいシラカバの皮を敷き、十センチほど土、さらにシラカバの皮をおき、また、土をのせていた。身をかがめないと通れないほど低く、狭いドアをあけて入ると玄関の土間、それからさらにドアをくぐり、部屋に入る。内部は正方形で土間、中央に大きな炉が切っており、その真上の寄せ棟の頂きに四十センチ角ほどの煙抜きがあった。壁に窓がないところから明り取りも兼ねていたようだ。部屋入口の左と右に寝台、一番奥に高さ一メートル前後の丸太を埋め、幅七十、長さ四メートルほどの厚い一枚板を渡したテーブル、その両側に高さ七十センチ前後、同じ一枚板の長いすなどがあつた。テーブルの左と右で少し高さが違うのは高い方におとな、低い方に子供が座るため。それでいて、いすが同じ高さで、おとなの足も届かないほどなのは、冬季節土間に足をつけると冷たいのを防ぐためという。特に、ベットは高さ一メートル、幅一・二メートル、高

さ一・五メートルほどで、高いあげ底の箱型。板底にムギワラ、その上に毛皮を敷き、毛皮をかぶって寝た。他と比較してこの家の規模から家族数も多かったように思えるし、また、世界一・二の長身民俗の北欧人がどうやってこの小さな寝台で寝たのか疑問がわいたが、寒さを防ぐため一方では夫婦が足を折り曲げ、赤子や幼児を抱き、片方では子供たちが折り重なるようにして毛皮の中に潜り込んで寝たこと。箱型だと、保温も楽だし、押し合っても落ちないためとの話だった。それで、真冬には老人や体の弱い人、子供はまいってしまうことがあつたようだ。太い丸太の屋根、小さな入口、窓なしの壁、寝台あるいはイスに北

国の知恵を感じながら、当時の人々がいかに寒さとの闘いに死に物狂いだっただかうかがえる。同時に、寝台横に調理台があるのに流し台がないことも食生活の一端をしのべている。数年前、ある本で日本の植

物学者が近代博物館の父・リッネ(一七〇七—一七八八年)が住んだ家を訪ねた時のことを書いたのを讀んだことがある。その記憶が正しければ、当時世界最高の学者の家も耐寒の面ではまだお粗末で、防寒のため書斎の横に狭く、細長い密室のような寝室を造り、それも高い、小さな入口から入り、真っ暗な中で寝ていたのを知って驚いた……と、民俗博物館で家屋の変遷の跡を見、この話を頭に思い浮べた時、現在高い水準を誇る北欧の家も、つい最近までこうした側面を持っていたこと、そして、ここ数十年の革命に等しい変化の大きさを強く頭に刻み込まれた。

ストックホルムのスカンセン公園は楽しい博物館である。民俗園と北方動物園を持つため公園の名を使っているものと思うが、世界最初の野外博物館(一九〇一年開設)とされ、多くの国の模範になったところ。ここにもスウェーデン各地から集めた古い民家・工房・教会など百三十棟が復元されているが、ガラス細工・

陶器作り、皮なめし、印刷・製本、鍛冶屋などの工房は、カ所にまとめられ、古い町並みを形成、それぞれ当時の服装をした職員を配置し、実演していた。例えば、ガラス工房は実際にガラス窯を使い、コップや花瓶、各種動物の形の文鎮を作ったりし、見る人を喜ばせる一方、記念品やみやげ品として売っていた。子供が三人、がっちり座り込み、ガラスの魂をアメのように伸ばしたり、切ったり、細工する職人の手つきを魅せられたように眺めていた。実際は、コペンハーゲンやフリ

ランド野外博物館でも行なわれている。北欧には野外博物館が多い。フィンランドに三十二、スウェーデンに二十二、ノルウェーに二十一、デンマークに七カ所。全部がノルウェー民俗博物館、スカンセン公園、フリランド野外博物館のように立派なものかどうかは知らないが、現在、世界の野外博物館の半数近くが北欧にあるとされ、また、歴史も古いものが多い。この数の多さについて

ては文化財保護意識のほか、北欧共通の現象として民俗意識や愛国的ロマン主義の高揚があるといわれる。

現在、高い生活文化、高い社会福祉水準を誇る北欧も、今世紀初めまではデンマークを除き、決して豊かな国々ではなく、ヨーロッパの片田舎であった。スウェーデン、ノル

ウェー、フィンランドでは前世紀六十年代から今世紀初頭にかけて、六十から百三十万の国民が職と生活を求め、新大陸を中心に海外に流出している。これは、当時のそれぞれの国の人口の四分の一から五分の一にあたり、それ以上の減少は国の荒廃にも繋りかねない有様だった。気候的に農業に恵まれず、工業化は遅れ、増え続ける人口を養う余裕がなかったからである。国民も大部分が一部屋ないし二部屋の小きな家でひしめいていた。このため、一九三〇年代以降各国が相次いで政策を転換、国民が逃げ出さなくともすむ困づくりに意を注ぎ、制度を整え、産業を興し、社会福祉の充実に努めた。特に

スウェーデンは「世界の政策の実験場」といわれるほど数々のユニークな政策を掲げ、国民と一体となって実施した。その努力の結果が今日の繁栄で、北欧の社会がほんとうに発達したのは近々四、五十年、主として第二次世界大戦以降、この三十年の出来事である。

こうしたこと踏まえ、「われわれの祖先や祖父の時代には、こんな小さくまじい家に住んでいた」と過去の現実を見せ「努力の結果、世界でも最高水準の家に住めるようになった」と国民全部に知ってもらい、自信と向上心を持ってもらうことは国づくり、町づくりにとって無駄なことではないだろう。

ノルウェー人がバイキング・ナンセンやアムンゼン・コナンチキ号について話す時は熱を帯びる。フリーランド野外博物館にはスウェーデン南部のハランドやスコーネ、西ドイッ・シュレツスイヒルホルジュタインからも農家が移設されている。これら地方は、その昔、デンマークが強大を誇った時の版図で、栄光の思い

出が絡む土地である。北海道とそう変らない人口規模で国を建て、しかも、先進国として国際社会に互していくのは容易なことではない。そうした場合、過去の栄光や国民的なロマン主義、誇りなど寄りどころに出来るものは何でも生かし、まとまていくことが必要でないかと考えるのは、必ずしもひにくれた解釈ではないだろう。話がいきさか横道にそれすぎたが、見た限りの狭い範囲内でもそれぞれ特徴が感ぜられた。

ノルウェーの民俗博物館が生真面目なのに対し、スカンセンは半ば公園という性格から遊園地・動物園・簡易登山鉄道もあり、教会では結婚式、野外劇場では音楽会、広場ではフォークダンスなども行なわれ、市民のレクリエーション施設にもなっている。フリーランド野外博物館は農村生活を中心にしたものであった。行く機会はなかったが、デンマーク第二の都市オーグスのガンムル・ビューは町家の野外博物館といわれている。同じ野外博物館の名称であって

も、地域によってはバイキング関係を取り入れたり、特徴を出すのに心を遣っているようだ。

博物館は研究と教育、インスピレーションの三つの機能を持つとされているが、北欧の野外博物館をやブにらみし、これらはいずれも市内中心部にあって市民に勉強と憩いの場提供の役割を果たすと同時に、屋内展示では得られない数々のことを習い、感じ、博物館は「市民の大学」といわれるゆえんを改めて教えられた。札幌郊外小野幌の道立開拓記念館では北海道一〇〇年を記念し、その隣接地に野外博物館「開拓の村」建設の構想を進めている。今年から事業を開始、計画によると十年がかりで、開拓の先駆者だった農民や漁民の家、その他四十一六十棟を移設、復元し、後世に残していくが、北欧の野外博物館に負けない立派な親しまれる施設になってくれたらと願っている。

会員館園は、現在七十五施設ありますが、その中から最近会員になりました雪印乳業史料館・砂原町郷土館、エルムユーカー織民芸館を紹介し

新加入館園紹介

雪印乳業史料館は、創業五十周年記念事業の一環として昭和五十二年九月に落成し、一般に公開しております。危機におちいりつつあった北海道酪農を盛んにし、良質の牛乳・乳製品を造って、日本中の人々の生活と健康に役立ちたいという理想を掲げて、志を同じくする酪農家が集って北海道製酪販売組合を結成したのが雪印乳業の前身です。

雪印乳業史料館

アメリカ・オハイオ州大学で勉強して帰国した佐藤資技師(後の社長)が唯一人で手廻しのバターチャインでバタ

造りを始めました。

生産は次第に増えてきましたので、これに対応するため製造室は総タイル張の衛生的な工場を建設、機械もアメリカから輸入して、近代的な工場が雪印北海道バターとして生産を開始しました。

バターの生産は順調に増えていきましたが、販売の方はなかなかたいへんでした。バターやチーズ等は外国人か日本人でも極く一部の人達にしかなじみのない時代であったので、東京のデパートで見本用のバターを山と積んで無料でさしあげますといっても、持っていくてくれる人が少なかったといふことも、推察することができましよう。

それから五十年、幾多の苦難に会いながら今日を迎えたのでありますが、雪印乳業の五十年は、また北海道酪農の歩みと表裏一体でもあったわけです。

水産王国北海道が二百海量問題で締め出されて魚価が高騰し、米が余って北海道の稲作が大巾に減反されている現在、良質な蛋白質・カルシ

ウム等に富む牛乳・乳製品を供給する北海道酪農に大きな期待がもたれてきております。雪印乳業史料館は、雪印バター工場が最初に建設された緑りの場所に建設され、諸先輩の血と汗のしみ込んだ創業当時から機械器具・文書・

広告宣伝物等が展示されておりますが、バター・チーズ等の近代工場の様子も動く模型で見えて頂くようになっております。

また乳製品に關した文化映画も数本用意し、ご希望の方にはご覧頂くよう準備致しております。

日曜・祭日、第一・三・五土曜日以外は無料で開館しておりますが、六月から十月までの間はかなり混み合いますので、なるべくそれ以外の月にごゆっくりご覧頂ければ、

ありがたいと思っております。受付時間は午前九時から十一時、午後一時から三時(土曜日は午前中)となっております。

(史料館長 室本清)
雪印乳業史料館所在地
札幌市東区苗穂町六丁目

電話直通

(〇二七二一五〇一三)
代 表 (〇二七四一一一一)

砂原町郷土館

砂原町郷土館は、町の中心から半道ほど東寄りの高台で国鉄函館本線渡島砂原駅の直ぐ近くにある。この場所からは漁港が望まれ、内浦湾沿岸にあって漁業の町であることが一目でわかる。近年、漁業が順調に伸びていることもあって住宅の新築、改装が急速に進んで屋根の赤や青が駒ヶ岳のすそを覆う緑と内浦湾の海の色に浮いて、この位置からの景観は絵画的な趣きがある。

郷土館は、六角形をした鉄筋コンクリート造二階建ての展示室と集会室、研修室、管理室などの部屋がある木造モルタル建ての二つの部分から出来ている。建物は、昭和四十九年に建てられ、その延面積は五百三十平方メートル、

うち展示室が二百七十平方メートルを有している。郷土資料収集では、建設年度から今まで一般町民や郷土史研究グループの協力を得て民族資料、生活用具、漁具類など千数百点ほどに達している。展示に当っては、昭和五十一年に業者を入れて、内装、展示などの工事を行い同年から一般に公開している。展示室の状況は、中に入ると、先ず、町の全景写真によるパノラマと町内二ッ山遺蹟の考古資料が目に入る。また真赤に染った内浦湾を背景にして自生する樹木や小動物、地理、地質や大謀網の模型、実物の磯舟などが展示されている。

昭和四年に大噴火した駒ヶ岳の様子をパネルにし、地鳴りの効果音で当時の爆発のものでごさを想起させる工夫がこらされている。二階には、明治初期の茅葺の質素な民家の一部が復元されて、当時の生活をしのばれる。展示室の基本展示は、そのほか多くの資料を展示しながら砂原町の草創期から現在の発展過程、そして未来へと構成されるように配慮されている。

郷土館の運営については、運営委員会の意見を聞きながら運営の充実を図りつつあるが、現在、専任職員の配置がなく館活動は思うようにならない面を持っている。そのため展示室の公開日も、入館料は無料であるが、特に希望があつて来館する機会を除き、一、十五日の月二回だけとしている。また、集められた郷土資料の保管をする収蔵庫が狭く増築が望まれている。このようにいくつかの問題を抱えているが、館職員を整えることを含めて、郷土館活動の内容をより深いものとし、住民の要求に対応することを目指しているところである。

(砂原町郷土館 菊地)
郷土館所在地
茅部郡砂原町字会所町
電話(〇三十四八)二五六七

展示室の基本展示は、そのほか多くの資料を展示しながら砂原町の草創期から現在の発展過程、そして未来へと構成されるように配慮されている。

民芸館

エルクム・ユーカラ織
 北国の手織であるユーカラ織の展示と、制作のための染色、ハタ織の研究センター活動を中心にしています。ユーカラ織は、北海道の風土をテーマに、羊毛と綿、絹などを素材に二百点近い色を組合わせた手織であり、またその作品は、「用の美」としての衣服や、小もの類、つまり民芸品に及んでいます。
 現在新しい工芸館を建設中で、昭和五十五年春に完成しますが、約五万平



新しい工芸館 昭和55年5月開館

北海道博物館協会役員

これまで役員でありました副会長の石川政治氏・理事の倉満氏・同小川安久氏・監事の小松三郎氏が人事異動ある

いは退職により館長を退任したため、過日行なわれた総会において夫々後任の館長であります池田和男氏・笹井仁氏・寺島敏治氏・柴田健治氏の四氏が選出され、残任期間を引継ぐことになりました。

なお、このため、現在の役員は、次のとおりです。

- 名誉会長 大飼哲夫
- 北海道開拓記念館々長 中川 敏
- 前札幌市円山動物園々長、八月三十一日退職後は個人会員 池田和男氏
- 市立函館博物館々長 松井恒幸
- 旭川市立郷土博物館々長 遠田恭行
- 北見市立郷土博物館々長 北川芳男
- 北海道開拓記念館学芸部長 米村哲英
- 網走市立郷土博物館々長 内海量夫
- 室蘭市立青少年科学館々長 山丸武雄
- 白老民俗文化保存財団会長 笹井 仁
- 稚内青少年科学館々長 工藤欣弥
- 道立三岸好太郎美術館々長 三浦徳四郎
- 夕張資料館々長 寺島敏治
- 釧路市立郷土博物館々長 矢野孜夫
- 北海道開拓記念館普及課長

事務局より

昭和五十二年度の総会で事務局を引受けてから早や一年半になろうとしている。この間、一番大きな事業は、今年度の大会でしたが、テーマの設定、発表者あるいは助言者などの人選において事務の不慣れから会員の皆さまには多大のご迷惑をお掛けしたことと思えます。深くお詫びいたします。大会の開催にあたっては、開催地である富良野市及び富良野地区広域社会教育協議会の絶大なご協力により、無事予定どおり終えることができましたことをあらためて本紙をかりて厚くお礼申し上げます。また、大会が成功裡に終えたとはいえ、会員各位が日夜課題としている問題を発表、

- 理事 武田 厚
- 道立近代美術館学芸部長事務代理 柴田健治
- 小樽市博物館々長 佐藤英介
- 札幌ビール(株)史料館々長 米村喜男衛
- 北海道博物館協会顧問 網走市立郷土博物館名誉館長 片岡新助
- 元阿寒和琴博物館々長
- 顧問 武内収太
- 五陵郭タワー資料館々長
- 顧問 米村喜男衛
- 網走市立郷土博物館名誉館長
- 助言・意見・討論の中で熟ぼく提起されたことは、北海道博物館協会が、今後進むべき方向を示しているようであり、協会がさらに一層一致団結し、この具体化に努力していかなくてはならないように感じています。
- 終りに、事務局を担当している当園でも人事異動があり、職員が変わりましたので、この欄をかりてお知らせ致します。ご用のときは、次の者にお申し付け下さい。
- 事務局長 金森 裕
- 円山動物園々長
- 幹事 日笠和良
- 円山動物園管理課長
- 舟田典彦
- 円山動物園事務係長
- 松居国男
- 円山動物園事務職員